

グッド・ラック

有森信二



一枚の写真がある。四人の男たちが写っている。男たちの頭上には、墨字が流れて半ば朽ちかけた「紫雲寮」という額が掲げられている。

写真はいくらか色褪せているが、扁額の下の方の男たちの若さは変わらない。むしろ、際立っていると云ってよい。

夏の陽を浴びて高く伸び、自らの深い陰を宿した青桐の緑も、みずみずしい。

一番左のランニングシャツが野田、次が坂上さかがみ、その隣で腕を組んでいるのが私、そして右端の学生服が小田垣おだがきとなる。私たち三人が殆ど裸同然なのに、小田垣だけは詰襟を着て、特徴のある大きな目玉を正面に向けている。

このときの私たちが、どういう成り行きで写真を撮ることになったのか、二十数年を経たいま、思い出そうにも思い出せないのだが、とにかくS予備校の寄宿舎である紫雲寮の同期のうち、四人が特別な関係であったことはいうまでもない。つまり、四人が同じ高校の出身であり、揃って理科系の志望であるという点で、教室でも、銭湯に出かけるときも、街に出るのも一緒であった。寮の部屋も、私と小田垣、野田と坂上が相部屋という具合で、この写真を撮ってわずか三月足らず後にあのことがもちあがるまで、私たちは殆どの場合、一つに群れ、一つのものとして馴れ合ってきた。

いまここに、届いたばかりの高校の同窓生名簿がある。野田は故郷の市立病院長と記され、坂上は一流電気メーカーの

開発室長という肩書きである。私は二年前まで勤務していた私立高校の教諭のままで登載され、小田垣は「米国在住」と記され、現職、現住所とも空欄となっている。

同窓生名簿は、この正月、厄除け祈願と、卒業二十周年を兼ねて行われた十数年ぶりの同窓会の際の情報をもとに作られ、中央官庁に勤める幹事役の遠藤の、「次回の厄開けの会の席には、全同窓生の出席を期待します」という添え書きとともに送られてきた。

私が会に出なかつたのは、いまの職につく前の、就職準備中であつたための忙しさと、無職のゆえもあり、遠藤たちのようなエリート組に対するためらいとが、心をいささか頑なにさせてしまつていたためでもあつた。

私の他にもかなりの欠席者があり、遠藤たち幹事役の意気込みに水をさした格好になつてしまつたが、会は野田や坂上を中心に三次会にまで繰り出すほどの盛り上がりを見せたという。

「俺のクラスだけだ、無事なのは。他のクラスは皆、一人や二人は死んだぞ」

坂上から電話が入つたのは、その酔いもまだ醒めないのではないかと思われる、翌日の昼少し前だつた。「四組の前川は肺癌、七組の東島は飛び下りだ。心中も、ヤクザに刺されたやつもいるぞ」これが飲まずにいられるか、と坂上はかなり荒れ気味だつた。

「入試や就職に勝つたの、負けたのなんぞ、くだらんこつた。

結局、これっぽつちのことではしかない」

学年でいつもトップグループにいた野田からも、坂上がひどく動揺していたが、どういふ訳なんだ、と聞いてくる始末だつた。

「あいつの涙もろいところは、相変わらずだけど、ああも泣けるものか。一人一人の手を握りしめ、さめざめと泣くんだ。最初から最後までな。どうしてだ、いつたい。なんといおうと、いまあいつは、一万五千人の従業員の命運を握るといふ立場にある男ではないか」

野田は病院の拡張の準備で忙しいといいながら、三十分近くも喋り続けた。

この二人からの電話の間、私の頭を占めていたのは、失業中の自分の身や、死んだという前川や東島のことや、泣き上戸を演じたという坂上のことではなかつた。

小田垣のあのときのことが、

「いままで、さざめき揺れていた水の面がふいに静まり、奥底から、鋭く光を放つ一本の錐が突如ゆらめき躍り出た」

というふうな、私の胸の内に鮮やかに甦つてきたのだつた。

紫雲寮の八十四人のなかで、私たちは特待生と呼ばれ、八十人が住む二階建の寮棟とは別の、予備校の本館の最上階にある二つの部屋に住んでいた。

S予備校は、摺り鉢状のこの街のほぼ中腹にあたる斜面に建っており、二階部分が玄関になる半地下一階、地上三階と

いう構造になっていた。寮は、その本館と同じ敷地にあり、二階建の四十室（うち五室は女子学生用となっている）が南北に細長く、本館に寄り添うように建てられていた。

だから、私たち四人は、いつも寮の屋根を見下ろす位置にいて、県道から五十二段の階段を上がって、本館や寮に入入りする連中の姿を見ることが出来たし、アドバルーンが上がり、夜にはネオンが明滅する繁華街のあたりも、真下に見下ろせた。

特待生というのは、入学料も授業料も食費も一切いらなかわりに、週に三日だけ教室の簡単な掃除をすれば済む。その分、一応この予備校のホープと目されているのだから、一年後にはきちんとした結果を出さなければならないのだった。

この期待に最も応えられそうな存在は、野田だった。野田は一番の難関といわれるT大の医学部を、この春、おそらく確実であろうと期待されながら落としていたが、四月以降の成績の伸びからみて、今度はまず間違いない、という位置につけていた。

次は、小田垣だった。能力からみれば、理数科目のセンスは野田以上で、特に、論理性を必要とする数学や物理の授業では、鋭い質問を浴びせ、しばしば教師をたじろがせた。小田垣もやはり、T大の理学部を志望していた。

二人の後はかなり距離をおいて、坂上と私が追っているという具合だった。坂上は私立の工学部、私は地元の国立の薬

学部を第一志望にしていた。

「靴下も下着も二枚あればいい」

小田垣は、私より三日遅れて入室してきた。荷物といえばシオルダーバッグが一つで、私のがそのあまりの少なさに驚いていると、平然と言葉を返してきた。

シオルダーバッグの中身も、本当に上下の下着が二枚ずつと、辞書類が二、三冊、それにタオルに歯ブラシという具合である。上着は、高校の制服が一枚きりで、他にはない。

高校時代の小田垣を知らないわけではなかったが、通って来る方向も反対で、おまけにクラスが違っていたこともあり、細かな生活ぶりまでは知らなかった。

私たちの部屋であるA-2号室の生活は、小田垣が入居したその日から、奇妙な様相をみせ始めた。

A-2号室の朝は、きつちり六時に始まった。六時になると、すぐ真向かいにある米軍基地からチャイムが流れ、続いて米国歌と君が代がかなりの音量で鳴りわたるのだった。

東の窓がいつばいに開け放たれ、初春の冷やかな朝の空気と一緒に、大鐘を打ち鳴らすほどの音量で、それらが布団に丸まっている私の耳に飛び込んでくる。

薄目を開けると、枕元に小田垣が窓の外を向いて立ち、上半身裸で、ちょうど応援団がやるように反りかえったり、屈みこんだりしながら、腕を激しく振っているのだった。

ブーン、ブーンと腕が鳴る。いや、空気が鳴る。部屋中の空

気が、縦に、横に、斜めに切り刻まれながら震える。

上半身の運動が止むと、小田垣はおもむろにズボンを脱ぎ去り、窓の方を向いたまま下着まで脱ぎ去った。そして、ゆつくりとその下着を裏返しにして、また穿くのである。あつげにとられて眺めている私に気付いていたのか、小田垣は大腿で私の頭を跨ぎ越し、「こうやると、まっさらと同じだ。起きて、一番に下着を替えると気分がいい」と、ニヤニヤしている。

小田垣は、自分の机の真上に一本の紐を張りわたし、洗濯挟を四つ取り付けると、二度、三度と裏返しにしたシャツや下着を、水をくぐらせないまま吊した。しかし、シャツや下着はまだよかつた。問題は靴下だった。

「すごい臭いだ。これじゃ、本館三階中の住民がお前の下着と靴下の臭いで窒息死してしまう」

「この廊下や天井にまで染み込んだ臭いは、およそ百年は消えねえな」

野田と坂上が、隣の部屋からやって来て、紐に下げられた下着や靴下を面白そうに見上げ、私たちの部屋に座り込む。

「慣れてしまえばなんてことはない。人間、臭いだのかゆいだの、ちっほけなことばかりいうてると、ものの本質なんぞなにも見えっこねえ」

小田垣は、伸び放題の顎髭をむしりながら、「なにせ、一九××年にはハレー彗星がやってくる。極の氷が解け、数メートルも海面が盛り上がるか、大地震や異常気象が勃発する

かもしれない。それをどう認識し、対応するのか。こいつこそ、われわれにとって究極の問題だ」などと、得意の話題に引き摺り込む。

野田たちも、「まだ、二十年以上も先の話だぜ。それよりいまは、下着と靴下に積み重ねられていく臭気の実態の方に興味が湧くな。現実の話だよ、これは」と、負けていない。臭い、臭い、を連発しながら、野田たちはいつまでも部屋を出て行こうとしないのだつたし、一枚しかない学生服を着込んだ小田垣は、私に四人分のコーヒーをいれさせ、「明日や明後日のことしか考えられないくらいの頭では、たとえどんな大学に受かつたとしても、お先真つ暗つてとこだな」と、みんなのことなど眼中にない。

野田や坂上は、一番最後に入寮した小田垣のやり方にぶつぶついながら、暇を見付けては私たちの部屋を訪ねるようになり、A-2号室は四人の溜まり場になってしまった。

それにしても、高校時代から成績は野田とともにずば抜けていた小田垣であるが、同室になって初めて気付いたことは、机に向かう時間が殆どないということであった。殆どというより、全くない、といった方が適切かもしれない。

授業に欠かさず出るといふことは、特待生であることの義務であるからしかたがないが、それ以外の時間は、ふらりと図書館に行ったり、近くの教会に出かけたり、米軍基地のあたりを散歩してきたりという具合である。部屋にいて、教科書でもない参考書でもない、図書館で借りたというぶ厚い本

を、背中を見せ寝転がった格好で睨んでいる。

なかでも、教会と小田垣、という取り合わせのことはまるでわからないのだが、「こいつはハートの問題だ。『へそ曲がりの冷酷な時間』というやつに『誰何する』ためのな」と多くを語らないが、ともかく『図書館、教会、米軍基地』という三地点を、コースとして定めたということらしい。

月末になると、予備校玄関横の掲示板にその月の実力テストの結果が張り出される。

特待生の四人は、他をかなり離して上位にいるのだが、なかでも野田と小田垣は、私と坂上に決定的な差をつけ、ほぼ完璧とも思える数字を並べていた。

陽射しを正面に受けて光る掲示板の、ガラス内の数字を眺めながら、私は合点がいかない。

野田の数字の方はわかる。頭の切れはなんといつても抜群であるし、少なくとも私の二倍近い努力もしている。私などとても及ばない数列や微積分の難問を、何時間かかろうとあきらめず、結局解いてしまう。

わからないのは小田垣である。ぶ厚い図書館の本を睨み付けていたり、腕を振り回す例の運動をしたり、逆立ちをしたり、片肘を枕に寝転び、ぶつぶつ唸り声をあげている。そのうち、ウイスキーのポケット瓶（勿論、予備校では禁止されている）を二口、三口飲み、大酈で眠ってしまう。

私が同室になってから、小田垣が机に向かっているのを見

たのは、入寮手続書と進路調査表を書くときぐらいで、あとは一度もないといってよい。その証拠に、机上の電気スタンドを持たない。入寮手続書と進路調査表のときも、私が、「こつちの机を使ったら」というのを聞かずに、「なんでこんなに疑り深いか。わけのわからん誓約書を出させたり、T大志望と書かせたり、まるで俺たちをがんじがらめにして、檻にでも閉じ込めたつもりでいる」と口を尖らせ、部屋の四十ワットの明かりでしぶしぶ書きあげたのだった。

特待生としての週に三度の掃除は、月水金の夕方、と決まっていた。

七、八年前の特待生、つまりこのS予備校が出来て間もなくの頃は、予備校の名を知らしめることが主目的であったから、彼らには学習以外のことは一切課されなかつたという。どころか、その結果によっては、かなりの額の奨学金さえ与えられたそうだ。

しかし、二代目の校長に代わってからは、学習一辺倒よりも、インターバル式の方が効率が良いということで、学校行事として体育祭や文化祭が採り入れられ、寮の方でも、ソフトボール大会や夜間の鍛錬行進、毎日の炊事当番（炊事婦のアシスタントであるが）や、トイレや庭の掃除当番が決められた。特待生には、トイレの掃除当番や炊事当番は与えられないかわりに、教室の掃除が課されるようになったという。

「結局、いまの校長が野心家でケチなだけだ。もつともらし

い理由をこしらえ、金を浮かせようとしてるのさ。その狙いは、来年春の市議選だからな」

坂上は、三人兄弟の末っ子で、長兄が同じ特待生だったというところもあり、この種の情報には特に詳しい。先代校長の時代に、S予備校は飛躍的に伸び、現在では隣県やその他の県からもかなりの生徒を集め、成果もまずまずだった。

初代の校長は、応接室の写真でしか見ることが出来ないが、篤実そうなたい眉を持ち、穏やかな目をいくら傾げ加減に落とし、両手を膝の上で組んでいた。それに比べ二代目は、背が高く、押し出しも立派で、坂上のいうように、教育者というよりはやはり政治家といった方が適切な風貌である。

「これは一種の勘だけど・・・」

と、坂上はことばを濁しておいて、「かなりしたたかなやつだ、ということだけは確かだな」と、いまの校長のことをいう。それは私も同感で、どこかにうそ寒い、ナイフみたいに冷やりとする部分を、隠し持っていると思う。

特待生である私たちは、他の生徒より多く校長室に呼ばれるし、また、寮生みんなが集まる夕食後の懇話会と称する三十分ほどの時間にも、何度となく校長の話聞かされるのであるが、そのいずれのときも胸を突かれるほどの思いをしたことがない。それらの話の多くは、他の模範となるよう頑張れたの、国の将来を担って立つようになれたの、そのためには現在の苦しみに打ち克つことが必要だのと、聞いたふうな話ばかりで、小田垣などは、あからさまに不快な顔をみせ、

大きな欠伸をするのだった。

そういう意味では、市議の資質は十分というところであり、私たちを前に弁舌の練習をしている、と思われるふしもないではない。

とにかく、このいきさつはなんであれ、私たちは月水金の午後、教室の掃除を課せられた。

といっても、二百人が入る教室が四つだけしかないのだから、一人が一教室分の面倒をみれば済む。

しかし、いつの場合も、私たちはそれぞれの教室に散ることとせず、四人が一緒に一部屋一部屋を回った。都合よく分担を決めてしまえばいいことであつたが、賑やかにやる方がいいと坂上がいい出し、結局それが私たちのやり方になつた。火木土には、学校の契約した清掃業者が入るのだったから、掃除といつても私たちの仕事などないに等しいものだったが、誰もいなくなつた教室の板を踏んで、スリッパやつつかけの音を鳴らして歩くのは、悪いものではなかつた。

そんな時も小田垣は学生服を脱がず、坂上はスパイダースの歌を口ずさみ、野田はあまり気の乗らない様子で、ポケットに手を突っ込んだまま一番後からついてきた。

寮の門限は、九時だった。

授業が終るのが五時。夕食が六時から六時三十分まで。そして、引き続き懇話会が三十分程度行われ、寮生たちはその後で買い出しに出たり、銭湯に行ったりするので、だから、殆ど自由な時間はない。

九時からは、必ず机に着いていなければならない。ちょうど九時に、校長が見回るのである。校長がいない時は、いつも炊事婦を指図して怒鳴ってばかりいる校長夫人が交替する。校長の目も嫌であるが、寮生たちは、夫人の方をより恐れている。

門限に遅れると、一回につきトイレ掃除三日か、一週間の間銭湯以外への外出禁止、という懲罰が課される。校長の場合だと、要領よくやればうまく逃げおせることが出来ないこともないが、夫人の時は替玉など殆んど効果がない。夫人は一人一人の顔を実によく覚えていて、要注意人物が誰か、誰がどこに出かけたのかなど、鋭いアンテナを張りめぐらせている。

したがって紫雲寮の九時は、一日で最も静寂な時間帯になる。九時から十二時までは、寮規則で最も重要な「沈黙の時間」となっているからである。

しかし、八十四人の寮生の中には特殊才能のある者がいて、どういふふうに替玉を使うのか知らないが、繁華街のはずれまで遠征し、朝方に帰ってくる常習者が二、三人いる。

彼らは二浪や三浪の連中が主で、女の値段がいくらだとか、ゆうべの女がどんなによかったとかを、多分替玉の仲間であらう連中に、泡をとばして喋っている。彼ら仲間たちは、沈黙の時間の合間をみはからって裏庭に出て煙草を吸い、ポケットウイスキーをまわし飲みしたりしていた。

私たちは、八十人とは別棟であり、それがために彼らから

羨ましがられ、あるいは疎ましがられているため、彼らの詳しい動きは伝わってこないのだが、替玉仲間の中に青山という、坂上とウマの合う者がいて、彼の話から寮棟でのことがうすうす知れる。特に、琴尾明子ことおという眼元の涼しい子には、「妖精」という綽名が付けられ、多くの男子連中が競って、彼女の部屋の隙間からメモを差し入れたりしているらしい。

沈黙の時間の規制は、私たち特待生には特に厳しく、校長も夫人も、いきなり部屋に抜き打ちで入ってくるのであるが、小田垣はいつの場合でも積みあげた本を枕に寝転がっていて、その姿勢を崩そうとしない。動じる気配もない。

校長も夫人も、いくらトップクラスの小田垣とはいえさすがに見兼ねたのか、「多少は好きにしてもいいとはいったが、勝手をして、他人を巻き込んでいいとまではいわなかった筈だ」と、洗面をつくり、部屋のあまりの臭さに鼻をつまみ、出て行くのだった。

野田は、高校三年の二期までバレー部に所属するというスポーツマンであったが、予備校ではやはり期するところがあるのか、寮棟横の空き地でのキャッチボールやバドミントンにも参加せず、体を動かしているところを殆ど見ない。運動など忘れたかのように、いつも机に向かっている。

久しぶりに晴れ上がった土曜日、耳ざとい坂上が、S川河口で貸しボートが始まったというニュースを仕入れてきた。

月に一度、最終土曜日の午後は授業もテストもないので、寮生たちは近くの山を歩いたり、食料の買い出しに出かけたり、デートをしたり、昼寝をしたりして過ごすのであったが、私たちはこれまでの三回とも、A—2号室で喋り込んでいるうちに、夕食となり、九時の門限となつてしまった。

「琴尾明子って子、知ってるか」

「勿論だ。私立文系の超美人。眼元が涼しく髪の毛の長い、ちょっと小生意気で、セクシーな感じの子。成績も上の中だ」

「そうそうジーンズ穿いて、相部屋のグラマーといつも一緒の子。誰だつて知ってるし、振り返るよな。その彼女、実はお前の猛烈なファンだそうだ」

坂上のことばに、調子よく答えていた野田は、みる間に真っ赤になつてしまった。

「だよな。懇話会のとき、われわれとは一番離れた席から、彼女が瞬きもせずに野田を見詰める目、あれはマジだな」

私も彼女を気にしている手前、そういうと、
「違う、あれは俺なんかじゃない。多分、坂上の方だ」

野田は、あわてて話を逸らそうとする。

「あの子が俺を！ それはないぜ……。しかし、とにかく、彼女が来るんだ。青山に頼まれて、アタックしたんだ。そうしたら、野田が来るならつて、な」

「冗談はやめてくれ。考えてもみる、バレーや野球ならともかく、ボートなどやったことがない」

「俺にだつてあるものか。青山が野田に知らせてくれという

から、伝えたまでだ。しかし、こいつはチャンスだと思うけどなあ」

「よっしゃ、俺にまかせろ！」

本を枕に転がっていた小田垣が、いきなり立ち上がり、「ごちゃごちゃいうてもしやあない、まずは当たつて砕けるだ」と、野田と坂上の背中を力まかせに叩き、先に部屋を飛び出して行つた。

S川のほとりの船着場には、青山と、もう一人、二浪組の雨宮という門限破りの常習者が先に来ており、煙草の吸い殻を五、六本も踏み躪つて、待つていた。

「なんだ、お前らだけか」

雨宮は、来たのが私たち四人だけであることを確かめると、眉をしかめ唾を吐き捨てた。

「おい、青山、まさかおちよくられてるのと違うか」

「ウーン、なきにしもあらず、ですね」

「そうですね、で済むと思うか。チッキシヨ、足元を見やがつたな」

雨宮は腕時計を覗き込み、「もう、一時間も待つたじゃねえか」といいながら、煙草をまた一本銜え、ライターを震える指で手荒に擦ると、足元の砂利を力まかせに川に蹴込んだ。そして、忌ま忌ましそうに私たちを睨めまわし、火を点けたばかりの煙草を川に放り投げると、青山に「俺は絶対諦めたらしいぞ」といい、うわあつ、と叫びながら走り出した。

「企みの主は青山だとして、で、雨宮の目的はなんだ」

小田垣が、走り去っていく雨宮の後を腕組みをして眺めやりながら、訊いた。

「企み、というほどじゃないけど、一種の賭けには違いない。琴尾明子が野田に気があるそうだという話をしたら、怒っちゃまってね。雨宮さん、あれで結構純情なんだ。琴尾明子のことを考えると、とても勉強どころじゃない……」

「雨宮に勉強？ あまり絵にならない」

「今度失敗したら、三浪だろう。いくらなんでも、やつぱり考えちまうよ。俺だって他人ごとじゃないしな」

「じゃ、替玉組など解散して、やるべきことをやればいいさ。俺にも、当事者として責任の一端はあるけどなあ」

坂上が、艇に飛び移り、ボートのへさきをピシャピシャ叩きながらいう。へさきを叩きながら、いつものスパイダースを歌っている。

「俺にはわかるんだ。雨宮さん、本当は琴尾明子の前に出たら、ものもいえつこない。それなのに、賭けたのさ。二時までに琴尾明子が来たら、試験はパス。もしも、来なかつたら……」

「来なかつたら？」

「……五千元、もらえるのさ……俺が」

青山は小さく肩をすぼめ、消え入りそうな声になる。

「しかし、琴尾明子って子、絶対来るっていったんだ。雨宮さんには内緒だけど、野田が来るからっていったらな。それ

も、ちゃんと三度も念を押し込んだ。違くないよな、坂上」
青山は五千元などどうでもよかったし、勝つつもりなど最初から無かったのだという。

野田は、そんなことだろうと思ったよ、といったきり青山の話には背を向け、シャツのボタンを外して裾を胸の高さに結び、手をひらひらさせたり、脚を曲げ伸ばしして、もうすっかりボートを漕ぐかまえている。

「そんなことで、女の子を使おうってやり方が、そもそも不純だよな。青山、お前ってやつは、あまり小器用に立ち回り過ぎるんじゃないか」

学生服の小田垣が、腕を組み、顎髭をしきりにひねり上げる。

「しかし、坂上、琴尾明子は本当に来ないのか」

「嘘をつく子じゃないよ、決して。すぐ近くまで来たんじゃないかな、多分」

「じゃ、俺と雨宮さんだけがいたので、俺たちの前に現われなかつた？」

「ということになるのかな。せつかく来たのに、目当ての野田はいない。嘘をついたのは、俺たちの方かもしれぬ」

私も廊下などで琴尾明子とすれ違つと、にわかにも動悸が早まってくる。大きな瞳をまともに見ることなどできないが、傍近くを通ると、甘い石鹸の香がする。その石鹸の香をのせた白い肌のことを思うだけで、胸が痛くなるのだ。

野田と坂上のボートは、河口に向かつて漕ぎ出したが、いつの間にか、S湾の広がりなかにまぎれ、姿を消してしまつた。ボートは初めてだという野田であるが、すぐにコツを覚え、オールを軽々と操り、水の流れにも乗つて、かなりのスピードで漕ぎ出て行つた。

私と小田垣のボートは、漕ぎ手の私の要領が悪いのか、どのようにオールを力まかせに回しても、頭から逆さに水を浴びるばかりで、いくらか動いたと思つたら蛇行して岸に体当たりし、少し進んでは他のボートと接触したりして、手慣れた顔でオールをさばっている男たちに怒鳴られ、睨み付けられた。

結局、私はオールを投げ出し、汗の吹き出したシャツを脱ぎ捨て、なるがままにまかせてしまった。

「そんなにひいひい、漕がなくてもいいぞ」

小田垣は、へさきの部分に寝そべり、こちらでいい、とちよつど柳が枝を垂れ、緑の陰をつくつている岸辺近くに舟を寄せ、「止まつてるボートの方も、案外しゃれてるのと違うか」と、眠たそうな目をしている。そして、ポケットからウイスキーの小瓶を取り出し、一気に半分ばかり呷ると、すぐに艇をたて始めた。

私はオールを離し、舟べりに顎をもたせ、見るともなく水面を見ている。

目を凝らしてじつと見ていると、薄茶色に濁つてばかりいると思つた水が、木洩れ陽を受けて青く透き通り、その滑ら

かな肌の奥には、微細な光のきらめきや、なにかの胞子の粒や、黒々とした水草のうねりが、おびただしく集まりさめいていて、まるで私に語りかけようとしているみたいである。「どこから来た？」

「どこへ行く？」

「誰？ 誰？ 誰？ お前は誰？」

「いつたい、なにをしている？」

オールから落ちる水滴が薄茶色の肌を微かに打ち、ときおり吹き抜けていく風が舟端を軽く揺すると、彼らの内に微かなさざめきのようなものが巻き起こり、彼らは次々にそんな問いを投げかけてくるのだつた。

私は、その度に「わからないよ、全然」と呟き、惨敗だつた受験のことを思い、気鬱だつた三月、四月のことを思いながら、顎を舟べりにのせたまま、白く青く透き通つた水の奥底を思つてみる。

「おーい」

青山の声である。青山は、ボートには乗らず、船着場に一人残つた。

「ひよつとして、琴尾明子は遅れて来るのかもしれないし、第一、このままだと、雨宮さんをついだようで、後味が悪いからな」

と、とにかく私たちが戻つて来るまで待つてみるというのだつた。

青山が、艇の上で跳ねている。

「聞こえるかあ。いま、琴尾明子と連絡がとれてなあ、彼女これから来るっていつてるぞお。必ず、来るって。時間どおりに出かける予定だったのが、思いがけない用事が出来て、遅れてしまったんだって」

青山は、声を限りに私たちに向かって叫び、今度は、髯から川岸に飛び移ると、琴尾明子がやって来る筈の方向である紫雲寮の方を背伸びして、何度も指差してみせる。

私は、青山のあまりのはしゃぎようにいささかとまどいながら、小田垣を見ると、小田垣は目を閉じたまま顎髭を撫でている。琴尾明子が来るそうだとすると、「だといいいけどなとにかくいいやつだよ、青山の野郎は」と呟く。

「野田、野田、聞こえたら、早く上がって来い。琴尾明子が来るっていうぞお」

岸辺を跳ねながら、青山が川と繁華街の方を交互に見る。両宮が帰って行った寮への坂道の方も、振り仰ぐふうに眺めやっている。

陽の光が楠の葉を洩れ、やわらかに歩道に振り注ぐ。歩道はS川添いにゆるくカーブし、芝の広がる米軍基地をめぐって河口へと続いていく。

歩道の片側、つまり基地側の芝には、高さ二メートルほどの鉄条網が張りめぐらされ、

「日本人が入ることは、日本国の法律で禁止されています」という立て札が、ところどころに立てられている。

私たちは、船着場とは対岸になる歩道を歩いている。野田と坂上と青山が前を行き、少し遅れて、私と小田垣がついていく。青山が坂上の肩にすがり、右に左に揺れながら「バカにするんじゃないよ」と何度も喚く。

結局、琴尾明子は来なかった。私たちはボートから戻り、二時間近く船着場のベンチで待った。

連絡では、三十分もすれば着くということだったそうだが、彼女の乗る筈のバスを何度やり過ごしても、彼女のジーンズ姿は現われなかった。

あと一時間待つという青山をなだめて、私たちは繁華街に向かい、喫茶店に入ってビールを飲んだ。私はアルコールを飲むのは生まれて初めてで、ビールのあまりの苦さにジョッキの半分も飲めなかったが、同じ初めてだという坂上は、一杯目を殆ど一息に飲み、二杯目もなんなく空けてしまった。

青山は、両宮を巻き込み、来年のことを賭けの対象にしたこと、それも、S予備校で最も目を引く存在である琴尾明子を賭けの相手に選んだことを、「なんでこんなことを思いついたのか、いまになつても思い出せない。ふつとなにかにそのかされたみたいで、ふらふらと体の方が先に動いてしまった」と、しきりに頭を叩きながら悔む。

「微妙な天秤みたいなものに乗っている俺たちには、来年のことはたいそうなことかもしれん。だが、なるようにしかならんさ。たいそうなことといえばたいそんなことだし、くだらんことといえば、これくらいくだらんことはない」

汗や埃の奇妙な臭いの混じった学生服の襟をはだけもせず、小田垣は、窓際の陽射しの中にいて、顎髭からビールの泡を垂らしながらい、「だけど、情が深過ぎるつても考えもんだ」と、青山の赤くなつた目の縁を覗き込む。そして、そもそも確かなものなどあるわけではないし、まして俺たちが二つや三つの失敗をやらかすなどあたりまえのことだから、なにも落ち込むには当たらないさ、と青山の肩をバンと叩く。

私には、小田垣は、船着場に来るときから、いや、あの青山が酔の上で飛び跳ねていたときには、もう結果が読めていたのではないかと、思えてならない。小田垣は当事者ではあるのだが、いつも、中心から離れた距離にいて、いや離れた位置に立つことが出来、それゆえ、ことを正確に読めるのだと考える。

「しかし、いかにも凶太さだけでもっているような雨宮さんが、自分の運勢を女の子が来るかどうか賭けるなんて、信じられないよ。てつきり、琴尾明子を呼び出すことだけが目的だと思つていたなあ。いまのまままで、そうしかないとかをくくつていた。だから、青山と作戦をねるときも、一旦野田の名前で呼び出しておき、実際野田を連れて来て、雨宮さんには悪いけど、頃合いをみて彼女をこっちにいたたくつもりだった」

坂上が、真っ赤になつた顔の中の目玉を忙しく動かしながらいう。

「今日のことは、なにも知らなかつた俺が一番ひどい目に

遭つた、ということにはならないか」

これまで黙つていた野田が、少し口を失らせる。

「それはそうだけれどさ、お前の場合、多少は俺たちレベルのことにも付き合つてもらわなくつちやな。でないと、実際、肩が凝つてしょうがないよ」

「・・・現実には、琴尾明子は来なかつた」

「野田の名前をもつてしても、彼女は来なかつた、か？」

「だろう！」

野田が急に険しい表情をし、だがすぐに、冗談、冗談と笑い飛ばしたので、つられて坂上も青山も笑い出した。

「この立て札、どうもいけすかねえ」

「ああ、全く頭にくるよ。『日本人が入ることは、日本国の法律で禁止されています』だとよ」

「日本国の法律で、というところが気に入らねえよな」

「うちの校長、基地擁護派だからな。今度の選挙、基地をめぐる熾烈な戦いになるというぜ」

「原潜が寄港するという、キナ臭い噂もちらほらだし」

情報通の坂上が、酔つた勢いもあるのか、ひときわ甲高い声をあげる。青山と肩を組み、あまり幅のない歩道をジグザグに歩く。

「学生や労組の連中が、噂を臭ぎつけて、あちこちで反対の狼煙を上げ始めたというぞ。すると、そのうち、この基地が彼らの究極の攻撃目標になる」

「それにしてもよ、この狭い街の一等の場所を占拠しちまつて。それも、こんなにだだつ広く。おまけに鉄条網を張りめぐらし、日本人は入ることが出来ませんだとお。許せるのかよお、こんなこと」

坂上は、激高すると涙腺が弛みやすいのか、ビールで赤らんだ顔の中の目の色まで赤く染め、青山と組んでいた肩の手を振りほどき、鉄条網に掴みかかろうとする。

摺り鉢状に落ちこんでいる平野の少ない狭いこの街で、鉄条網の向こうには、明る過ぎるほどの青い芝が広がり、みずみずしく伸びた木々の葉には涼し気な風が吹き渡り、空にはのんびりと雲が浮かんでいる。

「チッキショー！」

鉄条網に向かつて駆け寄った坂上は、自分の無謀さに気付いたのか、舌打ちをしながら引き返してきた。

「まともにぶつかっていったら、肉がずたずたになっちゃう」と

と悔しそうに唇を噛み、唾を吐く。

「しかしよ、人間のやることなんぞ、だいたいこんなもんじやねえのか。奪う、守る、獲り返す。また奪う、守る、獲り返す……。第一、歴史なんざ、こいつの繰り返しばかりじやねえか」

小田垣が、詰襟のホックを外し、首を学生服に埋めるように締め、つまらなさそうにいう。

「じゃ、小田垣はこんなありさまを見て、なんとも思わない

のか」

「いや、ただな、獲ったの獲られたのなど、珍しくもなんともない。ある意味では、しょうがない、と思うのさ」

「じゃあ、結局、擁護派だというわけか」

「擁護派だの反対派だの、俺には関係ねえ。俺はな、例えば、カオスのなかにAというものが生まれ、Aというものが滅んで、Bというものが生まれる。そのことをいつてるだけさ。」

つまり、Bの次はCで、Cの次はDという具合だ。その間には、自然の淘汰つてやつもあるのだろうが、盛衰を賭けての獲った獲られたという血塗られた、つまりそんな時の流れが、累々と横たわっているだけ、というわけだ」

「じゃ、俺たちがCだとすると、基地の向こうはDであったりする、というわけだ」

「まあ、CがDになったり、DがCに戻ったり、あるいはDがEになったりしても、根の部分ではたいして変わりばえはしない、というところかな」

「小田垣、そいつはよくわかるけど、ある意味ではヤバイ考えかもしれないな、いまのDにとって」

歩道の一番端を歩いていた野田が、少し咎めるふうにくぼせをしてきた。背の高い野田は、頭上近くまで垂れている楠の葉を力まかせに筆りと、葉を風に流す。折からの風に乗った楠の葉は、鉄条網よりも高く舞い上がり、芝の広がる丘のはるか向こうを越え、飛んでいく。

行く手に、星条旗と日の丸が掲げられた白塗りの建物が見えてきた。建物の屋上には、スピーカーが四方に向けて備え付けられ、傍に釣鐘みたいなものが下げられている。

「ラッララーラ、ララー」

坂上が、塀の内側の建物を覗き込み、低く米国の国歌を口ずさんだ。そのかなり大きな建物の周囲には、人影はなく、ただ一人、国旗の下に歩哨兵とおぼしき黒人が、ヘルメット姿で立っている。

なにを思ったか坂上は、いきなり塀にとり付き、傍の青山が止めるのを振り切つて塀をよじのぼり、「ラッララーラ、ララー」と歩哨兵に向かって声をはりあげた。

私たちは、突然のなりゆきに息をのみ、一さすがの小田垣でさえ、はつきりと顔色の変わるのが見えたぐらいであったが、一歩哨兵がいまにも私たちの方を睨み付け、カービン銃を構えて駆け寄ってくるのではないかと観念したのだった。

それほど、坂上の行為は危険を孕んだものであり、いくら酔っていたと弁明したとしても、カービン銃を突き付けられるぐらいの覚悟はしなければならぬ。「事件」であったに違いない。

「グッド・ラック！」

観念し、息を止めてじつと待つ私たちの上を通り過ぎていったことばは、意外にも陽気な響きの、私たちにも耳馴染みのあることばだった。おまけに、恐々目を上げた私たちに、大柄な黒人兵は、人懐っこい笑顔を向け、まん丸い目をウイ

ンクしてみせる。

しかし、そのすぐあとで、塀にだけはのぼらない方がいいというふうに着目すほめ、

「この建物のあたりなんか、ちつとも面白いところじゃないぜ」

というふうなジェスチャーをみせる。

「アム・ソーリー」

坂上が、頭を掻きながら塀の中段から降りてきた。

私たちはあわてて黒人兵に手を振り、駆け足で建物の前を離れた。野田も小田垣も、みんな一斉に駆け出し、百メートルも走つて、やつと止まった。

「やつぱり、CよりDの方が大物だよな。スケールが違うよ、鉄条網の向こうは」

「口惜しいけど太つ腹で、おおらかだよ。俺たちみたいにちまちましちゃいけないぜ。一本も、二本もとられたな、真実」

私たちは、一様に溜め息をつき、一様に肩を落とし、基地添いの歩道から離れ、橋を渡り、また船着場への道に戻った。

S川には、ボートが四、五艘長い影を浮かべていた。

黙つたまま歩いていく私たちの影はひよる長く伸び、バス停のある倉庫のビルの壁に折れていた。

いま離れてきたばかりの基地の上には、傾きかけた夕日が、朱の絵の具を、燦々と降らせていた。

チャイムが鳴り始めた。

チャイムは、あの白い大きな建物の屋上で鳴っている筈である。曲は、フォスターの「マイオールド・ケンタッキーホーム」だった。

そのとき、私はなぜか、黒人兵の大きな目玉を思い出していた。黒人兵の故郷、故郷の空気、家族の面々、山々の形、川の流れ……。それらを思う彼の胸のうちは、どのようなDのものなのだろうか、と考えた。

夏休みになっても、予備校に出入りする顔ぶれが変わる訳はないのだが、八月に入った頃から、急に青い背広を着た数人の出入りが目立つようになった。

彼らは、黒塗りの乗用車を県道に止め、五十二段の階段を足早に上ってくる。そして、一般生徒たちの集まる玄関は通らずに、校長宅の玄関へと直接入っていく。数は決まっていなかったが、二人のときもあり、三、四人のときもあった。

「校長、いよいよ立つらしいぞ。いま、その最後の詰めに入ってるらしい。票の予想がもう一つのところのようだけど、資金の方は十分圈内だというからな」

坂上が、未確認情報をどこからか仕入れてきた。

「いわれてみれば、ここ何日も校長の見回りがいないな。もう一週間以上前から、夫人ばかり。俺たちだっておかげで肩が凝りつ放しだ。そのうち、学校全体が選挙運動に狩り出されないとも限らないぜ」

「少なくとも特待生の俺たちは、ヤバイよな。例え、狩り出

されないにしても、相当なプレッシャーがかかることは間違いない」

「俺たちは懸賞金付きの飼い犬つてところかな。破格の懸賞金を手に入れることが出来るか。それとも、途中で懸賞金付きの自分を剥脱され、ヘドロの海に放り捨てられるか」

「いずれにしても、いよいよ、校長の説教のトーンが上がることだけは間違いない」

「なあに、俺たちがおたおたすることは無い。別に、こちらから頼んでただ飯を食わせてもらっているわけではなし、市議選に出るのは校長の勝手だ。市議選に出るために俺たちを飼っているのだとしたら、それこそおためごかしのインチキ野郎さ」

小田垣は、ウイスキーを舐めて一寝入りしていたのだったが、坂上の声で目を覚まし、不機嫌そうな顔で、部屋の隅に膝を立て座り込んでいる。窓を開け放していても、小田垣の机の上のシャツや靴下が激しく臭い、当の小田垣自身からも得体の知れない臭気が、蒸れて出る。

私の鼻は、春から初夏にかけての三月ばかりの間に、小田垣から立ちのぼる臭気には、かなり抵抗力をつけてきた筈であったが、さすがに夏に入るといけなかった。これまでの免疫が、まるで役に立たない。

それは野田や坂上も同じで、坂上などは、「俺、洗濯嫌じやないからさ、出してくれよ」などと話を向けるのだったが、小田垣は「部屋に入りたくなくなったら、それでいい。構うこ

たあない」というばかりで、とり合おうとしない。

「まあ、俺たちはいいとして、やつの身にもなつてやれよ」

と、野田が私のためにときどき助け船を出してくれたりするのだが、生返事を繰り返すに過ぎない。

小田垣の日課は、入寮第一日目と、全くといっていいほど変わらない。

六時のチャイムに合わせて裸で例の体操をし、それが終ると、下着を前日の裏返しに穿き替え、既に裏返しに穿いてしまったものは、机の上に張りめぐらした紐に吊す。

ある日の授業の時、私はいつも私たち四人は、最前列に席をとるのであったが―ふと、後ろを振り返つて、ゾツとしたことを覚えていた。私たちの後ろ二列ぐらいの席が、いつの間にか無人になつていた・・・。

その頃はまだ、どうかすると肌寒さを感じる程度があるくらい季節で、私自身、それほどひどく気にしていない程度の臭いであつたのだが。

野田たちも、その度に小田垣をたしなめるのだったが、小田垣は、「修業僧など、何十日、何年と、一枚きりの衣で過ごすのだ」などと開き直り、譲らない。

そういう具合であるので、野田も坂上も出入りしなくなるのかと思えば、そうではなく、暇をみつけてはやって来る。溜り場は、なぜかやつぱり私たちの部屋になるのだった。

「この頃、校長のところへ出入りしている連中、なにかいわくありそうなやつらばかりだな」

「大体、あの青い背広が薄気味悪いよ」

「政党の連中なんていつてるけど、どうも胡散臭いな」

「もともと政党の連中なんぞ、胡散臭いやつらばかりさ。ヤクザとタレントがミックスしたような連中だけが、生き残つていける場所だからな」

小田垣は、不興気に素晴らしい、窓から吹き込んでくる風に翻つている机の上の下着を見上げながら、

「人間、ただ生きてるだけで、垢がまつわりついてくる。歳を経るといふことは、いろんなものが見えなくなつていく過程である、といえなくもないな」

と、他人事みたいに呟く。

教室の出口で青山に会うと、琴尾明子があれ以来三週間も姿を見せないという。これまで欠席などしたことがなかったのに、バツタリ来なくなつてしまった。相部屋の子に訊いても、家の事情らしい、とばかりいうそうだった。

青山は、琴尾明子が来なくなつたことを、すべてが自分の責任でもあるかのように、うるたえている。

「毎日、毎時間、俺は、彼女が元いつも座つていた席を見る。時間の始めに一度、十五分経つてまた一度、また十五分経つて一度という具合に、その席が気になつてしようがないんだ。もういまでは授業など耳に入らず、いつも見ている。ひよつとしたら、時間の終りに、ひよつこり現われなとも限らないじゃないか。それくらいのこと、俺にはする義務があると

思うんだ」

青山は、額にこぼれかかる前髪を、痲性なほどに何度も掻き上げ、熱の浮いたような目をじっと私たちに向けた。

「昨日、事務に退寮届が届いたという。なんでも、すぐ近くにアパートを借りるとか、借りたとか」

野田が、青山の肩を軽く叩きながらいう。

「もし、お前が雨宮さんのことを本気で心配してるのなら、もうこれ以上彼女のこと、考えない方がいいと思うよ」

坂上は、青山から目を逸らし、そっけなくいう。

私は、琴尾明子が、黒ヘルメットを被って、この頃日曜日毎にあちこちの公園で開かれる、原潜寄港反対集会の場にしたという話や、郊外を、リーダー格の男のオートバイの背にまたがってとぶつばしていた、という話などをよく聞いた。

この冬、S市が各派の全学連や労組の格好の標的になるらしいという噂は、新聞でも口コミでも早くから伝わっていたが、予備校生の中からも、何人かが集会に参加しているという情報があった。勿論、耳の早い坂上などは、その何人かをかかなり正確に知っていたのであるが、琴尾明子の名前はその中になかった。

「彼女のこと、どう考えたら・・・」

「まあ、本当に家の事情が原因なのかもしれないじゃないか。心配したって、噂はあかねえよ」

「理屈では、そういうことになるけど・・・」

「あんまり入れ込んで、ためにならないっていうところが

正解だろう。しかし、お前の顔には琴尾明子が棲みついていた、と書いてある」

坂上は、青山の顔を見ず、S川の方を眩しそうに見やりながらいう。

小田垣は、教室の出口の階段に腰をおろし、

「創造主の創つたもののなかで、やはり女と穴、いやブラックホールと時間というやつが、最大のへそ曲がりだな」

と顎髭をひねりながら、なにやら一人頷いている。

デモの列が、繁華街の公園を出て、予備校下の県道を通り、基地のあたりで渦巻くようになった。

初め、デモは日曜日の午後に、それも、公園の隅で開かれた集会のついでに、ほんの申し訳程度に街の端を歩く、といったふうだったのであるが、いまでは、デモの規模はその何十倍、いや何百倍という膨らみをみせ、曜日、時間を構わず繰り出してくる。旗の数、スピーカーの音量、シュプレヒコールの声、そして道路いっぱいには広がる人の列・・・。

まるで、街中を席卷した群衆が、押し合いへしあいしながら土煙をあげ、標的を目指してなだれ寄せて行く、という風情である。

その標的であるのが、あの基地の白い建物であった。

群衆たちが、いつの間にかこれほど数を増したのか、いったいこれだけの人数がどこから現われるのか、私にはわからないのだが、いま、われわれを含めてこの街が、大きな一つの

節目を迎えようとしていることだけは、確かなことのようにだった。

デモの列が膨らむのと期を同じくして、予備校にやって来る青い背広の連中の数も増えていった。四人が五人になり、どうかすると、十人ほどになるときもある。連中は決まって大型の車に乗り、小脇に風呂敷を抱え、あたりに目を配りながら、長い階段を急ぎ足に上って来る。

夕食後の懇話会の席では、校長のスピーチが熱を帯び、十分のところ、しばしば一時間近くにもなった。

校長の話は、殆どの場合、デモの列を主体性を持たない烏合の衆だといひ、平和と市民の安寧を脅かす策動者に操られた無知、蒙昧の類いだといひ、時節を見誤った破壊、自爆行為であると、激しく、それでも教育者らしさを端々にみせ、諄々と説いていくのだった。

そして、結論は決まって、われわれS予備校は、新しい時代の真の指導者を養成しようとするのであるから、もし無知、蒙昧の類いに加担しようとする者があれば、建学の精神のつとつて、断固とした処置をとらなければならぬ、ということになった。

校長はスピーチの間、八十数人の寮生の顔を一人一人覗き込み、君たちはとにかく一年間、脇目もふらず学習に専心することであり、これは特待生も一般生も同様である、と語調を強め、最後はなぜか小田垣の顔にしばらく目を据え、話を終えた。

「窓を開けば安粉砕、内では無知、蒙昧の類いかあ。嫌になるよな、全く。ひどいところに迷い込んだもんだ。とにかく、これじゃあ、出来ることだつて出来なくなつちまうよ」
坂上が、窓を開け、街を見下しながら溜め息混じりの悲鳴をあげる。ランニングシャツが汗に濡れ、頬にぼつぼつ吹き出したにきびが白く膿んでいる。

野田は、長い足を投げ出して座り、
「まだ始まったばかりだ。これしきのことには耐えられなくちゃ、とても続かないぜ。けどさ、みんななんであんなに騒げるんだ。だつてよ、しょうがないじゃないか、来るというものは来るし、出るというものは出る。なにも、決して投げ遣りではないぞ。これが俺の持論だ。つまり、成るものは成るし、成らないものはどんなに騒ごうと成りやしない。不満だつたら、衆を頼むなんてやり方じゃなく、一人一人が自分自身にもつと強い力をつけるか、さつさと諦めるかだな。とにかく俺は、人間が本来、そんなに馬鹿ではないと信じることにするよ」
と珍しくよく喋る。

私など、デモを見ると血が騒ぎ始める。傍を通るときは、中央付近に琴尾明子の姿を探し、その旗竿を目掛けて駆け出したくなってしまう。そのくせ、校長の話にも頷いたりする。坂上にいわせると、一言で、おまえは節操がない、ということになるのであるが、結局、自分で自分がわからない、と

いう方が当たっているのだろう。

「どこから来たのか？」

「どこへ行くのか？」

「なんなのか？」

私は、いつまでもこんなことを自問自答しながら、挙げ句の果てにはこんがらがった頭を抱え込んでしまう。だから、いまだに、これという確かな進路希望も持てないでいる。

その点、野田はさすがで、医学部を出て、辺地の医療に携わるのが目的だという。出身が、本土から二時間半もかかる島であるということもあるが、父母を幼いうちに亡くし、それも、十分な治療さえすれば救けることが出来た病気であったというから、まるで浮わついたところがない。

「俺は、そういう意味でじゃなく、どちらに組することもできねえな。AかBか、という問いが一番の苦手だ。Aでもなく、Bでもなく、かといってCでもDでもない。ものごとは簡単に割り切れるものでもあるし、そうでもない。いうならば、Aでもいいし、BでもCでもDでもいい、ともいえるわけだ」

小田垣の方は、論理的思考では野田を凌ぐ力量をみせるのであるが、突き詰めていくと、すべてが「空に帰す」、という独自の持論をもっている。小田垣の頭のなかでは、瞬時にマクロがミクロになり、ミクロがマクロに交錯し、時間も空間も力オスの内にあるという。

日が暮れかかると、寮の裏手の高台になる民家から、最近急速に勢力を伸ばしてきた宗派の、題目を唱える声が、ぶ厚い束となつて一斉に降ってくる。

題目の声は、デモがこの街を練り歩き出してから、ふいに聞こえてき始めたのだつた。もしかしたら、以前からも変わらない音量で聞こえていたのかもしれないが、笛の音や、シユプレヒコールの声や、パトカーのサイレンの音などが、切れ間もなく耳を襲うようになつて、初めて間近に聞こえ始めたのだつた。

デモが去り、日没を告げるチャイムが鳴り終え、車や人の声が沈み、ふと、この街中が奇妙な静寂に包まれる時がある。街のいたるところで動いているすべてのものが、一瞬息をひそめ、まるで死滅してしまつた世界に放り出されたかのような、しんとした気配が辺りを覆う。

そんなとき、この題目が突如地の果てから湧き起こり、張り詰めていた静寂を破つて、私を現実と呼び戻してくれる。私はそれを、蟬の合唱みたいだと思う。確かに声はそこにあるのだが、声に包まれていると、肝腎の声のありかを見失つてしまう。

また、題目の民家とは数十軒おいて、これも民家を改造して造られた教会と呼ばれる小田垣が通う会堂がある。最近急に動きが活発になつたらしい。教会は、街の中心部に尖塔を光らせた礼拝堂を持ついわゆる教会とは趣が異なるが、若者たちが多く集うといわれる。彼らは、時間を問わずかなり

頻繁に出入りしているようで、交わす挨拶らしい「お帰りなさい」「ただいま」「行ってらっしゃい」という声が、近くの題目の間を縫って、微かに聞こえてくることもあった。

果たして、笛やシュプレヒコールのただなかにいると、笛やシュプレヒコールの息吹を感じることが出来るのだろうか。そして、叫び、渦巻き、ジュラルミンの盾に向かつて激しくぶつかり合い、悲鳴をあげて逃げまどう彼らは、どこから来て、いつたい、どこへ行こうとするのだろうか。

「こんな夜があつてもいいよな」

傍にいる小田垣にいうと、小田垣は頷き、

「じつと、自分と対峙してみるという時間。忘れちゃいけないね。例えば、いま輝きはじめてばかりの星の、燃えさかっているであろう火球である筈の実体と、その気の遠くなるほどの距離。距離をも呑み込む深淵。あるいは、ひとり天空を廻るこの孤独と、その正確無比な運動。いつたいなにものが、こういう苛烈なまでの掟を定めたのだろうか、とね」と、信じられないほどの小声で呟く。

私は頷きながら、黄昏の靄に沈んでいく街の風景を眺めやり、背に被さってくる題目の束や「お帰りにさい」の声を負い、激しく荒れた昼間のデモのことを、頻繁に現われる青い背広たちのことを、そして、どこに辿り着こうとしているのかわからない自分たちのこれからのことを、とりとめもなく思いめぐらすのだった。

私たち四人は、教室の掃除のために、人影のなくなった半地階の階段を上って行った。

いつもの場合は、玄関から入った事務室に面している一番教室から始めるのだったが、その日は、少し街をぶらつき、帰りに掃除をしようということになり、最初に半地階の四番教室に入ったのだった。

私と小田垣が教室の後ろから、野田と坂上が前からという手順で、箒とはたきをグループの一人ずつが持ち、ぶらりぶらりと机の間を歩いていく。

「こんなこと、してもしなくても同じなのにな。それでも校長、ちゃんと日誌を調べ、勤務評定を怠らないからなあ」

「選挙の準備で、目が回るほど忙しい筈なのに、決して俺たちには隙をみせないのだから、ご苦労なことさ」

「選挙に出る金があつたら、もつと質のいい特待生を増やすとか、傷んだ天井の修繕をするとか、冷暖房を入れるとか、教師の質をあげるとか、いくらでも方法はあるのに」

「そこが選挙に打って出る所以であるのさ。自分の名誉とプライドに関わることなら、金でも人でも使えるものは、なんでも使う気になるというから不思議だ。そのかわり、票に関係がないとなると、ピタ一文使わない。もし、先代が生きていたとしたら、目を剥いて卒倒しちまうことだろう」

坂上は、先代のことにも詳しいので、「一代で築き、二代で蕩尽し、とはよくいったもんだ」と、なりゆきを面白がっ

ているふうである。

野田は、デモにも選挙にも殆ど関心を示さず、こんな騒動のなかで気を散らすこともなく、計画どおりのことをやっている。成績もずっと同じレベルを維持し、小田垣が、多少好不調の波があるのに比べ、着実に医学部への道を歩いている。予備校の進路指導の教師も、野田の場合は百二十パーセント合格確実だといいい、なぜこの春に失敗したのかわからないと頭をひねるほどである。

進路に関しては、坂上の評価も次第に高くなり、私立系では最も難関と目される大学を勧められている。反対に、小田垣の場合は、成績にいくらかムラがあることと、日頃のことがマイナス点につながっているのか、周りの評価はそれほど芳しくない。しかし、志望校をクリアするのは、ほぼ間違いないだろうといわれている。

当の私は、入学時に出した第一志望校のレベルと、現在の成績がかなりかけ離れており、おまけに自分の希望進路がいつまでも曖昧であるため、一ランクレベルを落とすようにいわれている。

「九時の見回り。多忙な筈の校長にはご苦労なときさ。効果があるとも思えないのに、よけいに厳しくなりやがった」

「票を集めるためには、学校の質も落とせない。もつとも、その効果のほどについては、なんともいえないけどな」

「青山たち、この頃は替玉をやる回数が減つたらしい。効果があるといえ、まあそんなことぐらいか」

「やつらのことは、琴尾明子が原因さ。青山はいまだに立ち直れないでいる。授業中の教室を、ふぬけたみたいに、ぼおつと見回してばかりいる」

琴尾明子といえば、数日前の午後、繁華街の人混みに立ち、数人の仲間らしい薄汚れた男たちと、原潜寄港反対の署名とカンパを集めているのを目撃した。

彼女の表情には、すらりとした容姿で、教室中の男たちばかりか女たちまでの目をひいていた頃の面影はなく、頬は落ち、目には別人かと思えるほどの険しい光を浮かべ、唇のあたりになにか卑しいものを溜め込んでいるように見えた。そのことを、私は誰にもいわず、自分の胸にしまっておいた。

四番教室を終えると、階段を上がり、三番教室、二番教室という順に回っていく。

野田と坂上、小田垣と私といういつもの組合わせで、前から後ろへ、後ろから前へとただ歩くだけで、殆どするべきことはない。時々、傘やノートの忘れ物があるくらいで、塵も埃も、目につくほどのものはなにもない。傘やノートの忘れ物があった場合は、一番教室の隣の事務室に預けておけば、それで済む。

ところが、一番教室の教壇近くに来た時だった。

「こりゃあ、すごい！」

坂上たちのグループが、あわてて飛びすさった。

私たちが急いで駆けつけると、

『S基地撤去！』

『S基地爆砕!』

『原潜寄港阻止!』

という朱のインクの文字が教壇をぐるりと囲み、壁や床にばらまかれていたのだった。

野田と坂上が駆け出した。私も続いた。小田垣も遅れてついてくる。

坂上が先に、事務室に駆け込んだ。私たちも坂上の開けたドアから、すべり込んだ。

しかし、事務室には誰もいなかった。年配の事務長と、女の事務員の三人が、いつも六時、七時まで残っている筈であるが、彼女たちの机は片付けられ、窓も締め切られて、人のいる気配はなかった。

私たちは、互いに顔を見合わせ、何度か進路相談や面談の時に入ったことのある、事務室奥の校長室を覗いてみることにした。そうすることが正しいと思っただし、この教室の状況を一刻も早く伝えなければならぬと考えた。

というのは、校長室には明かりが灯り、少なくとも校長の在室は確かだと思われ、それに、緊急の用件を伝えるのは、直接の方がより適切であると思われるからである。

私が部屋のドアをノックした。返事はなかった。しばらくして、もう一度、今度はいくらか強めに数回叩いた。それでも、返事はなかった。

私がノブに手をかけ、回そうとした時、部屋の内側で、革靴が足早に走り寄る高い音がし、ノブのあたりに体当たりを

食わせる鈍い音が続いた。しかし、私の力の加減が勝つていたのか、ドアは少しだけ開き加減になり、ドアの向こうに、驚愕の色を露にした校長の顔が、まるで、スロモーションを見るように現われた。

校長の血の気の引いた顔の向こうに、私はうず高く積まれた紙包みの束を見た。

校長はなにもいわなかった。なにもいわずに、私と小田垣の顔を、睨み付けるばかりだった。

薄開きのドアの隙間からであるから、私にはそれ以上のものは見えなかったし、まして斜め後ろに立った小田垣に、中ものが見えたかどうか分からないのだが、校長は、小田垣の方に、まるで威嚇するような目を向けた。

野田と坂上の方は、ちょうど衝立の陰にいて、ドアの隙間からの校長の狭い視界には入らなかつたのか、校長は、私と小田垣の顔を交互に睨み付けると、いきなり力まかせにドアを閉め、内側から、荒々しくロックを下ろしてしまった。

その夜、小田垣は校長に呼ばれた。

自室ではなく、校長の自宅に呼ばれるのは例がなく、小田垣が初めてだった。

小田垣には、なにかの予感があったらしく、「ひよつとして、気が付いてみたらへドロの海の中、なんてことになりかねないよな」などと、掃除から戻って来たときに、苦笑いを浮かべながら私にいったものだが、実際に呼ばれたとき、

「なあと、どうせ俺の素行の悪さに愛想をつかしての、例のお説教だろうよ。そろそろ、『グッド・ラック』の巻かな」と、やれやれといった顔付きで部屋を出て行った。

正確には、小田垣はそれからわずかに青ざめた表情で部屋に戻り、シヨルダーバッグを抱えて出て行ったのだが、小田垣の姿を目にしたのは、その夜が最後、ということになる。

十時になっても、十二時になっても、小田垣は戻らず、翌朝のチャイムのおときも、裸で腕を振り回す、あのいつもの見慣れた姿はなかった。

気配を察した野田と坂上は、何度となく私たちの部屋を覗き込むのであるが、二人とも声をひそめ、「ちよつとヤバイんじゃないのかあ」と囁くくらいで、何もすることは無い。

「小田垣は、裏の教会に、ちよくちよく出入りしていたというからな」

「結構噂にのぼっているぜ。同部屋の住人として、気付かない訳はなかっただろう？」

「小田垣があのか？ 散歩コースの一つでしかない？」

「教会の方、基地撤去の重要拠点らしいし」

私は、小田垣を芯から捕らえる宗教や思想などある筈もない、としか思えない。

「あの奔放な小田垣に、『お帰きなさい』『行ってらっしゃい』だったの、とても似合わないよな。そのうち、たぶん、ふらりと戻ってくるだろうよ」

私がいうでもなく、しばらくして小田垣がいつものよう

に姿を現わし、またA—2号室に群れ合う自分たちの日常に戻ってくることを、みんな信じて疑わなかった。

しかし、三日が経ち、一週間が経っても、小田垣は戻ってこなかった。これらの日々も、米軍基地からチャイムが流れ、米国歌と君が代がやけに高い音量で鳴り響いた。

その間、校長からも、教師からも、事務の方からも、小田垣のことではなんの連絡も説明もなかった。

一番教室のあのインクの文字は跡形もなく消し去られており、文字を目にした生徒は、恐らく私たちの他には誰もいなかったであろうと思われる。授業も平常どおりに行われたし、寮での懇話会も、校長の九時の見回りも、いつものとおりに行われた。

一度、九時の見回りの時、私が小田垣のことを訊ねると、校長は、小田垣の父が危篤という連絡があり、家に帰っていると聞いた。だったら、そのうちに戻って来るのかと訊くと、「家計の支持者が危急の時だからなあ。学校としては、あれほどの優秀な生徒にトラブルが起ることは、身を切られるより辛い」といい、「それより、君は君自身のことを、いまはきつちりなすべき時だ」といい添え、急いで出て行った。

一か月が過ぎても、小田垣は戻らなかった。

小田垣の机の上には、吊り下げられたシャツと靴下がある。日のまま残されており、幾筋かのクモの巣が絡みつき、埃が積もって、ひっそり静まっているのだった。私たちを悩まし

続けていた臭いも日に日に薄らぎ、不思議なことに、いまでは間近に鼻を寄せても、殆どそれを感じない。

坂上が先になり、基地添いの歩道を歩いて行く。野田はズボンのポケットに両手を突っ込み、遅れがちについて来る。

つい二時間ほど前まで、このあたりをデモの列が激しく渦巻いていた。感度のよくないハンドマイクで喚きたてるアジヤ、シユプレヒコール。それを制止しようとするポリウームといったマイクの音量。盾に投石のぶつかる音。空気を引き裂く怒号と悲鳴・・・。

私は、いつもA―2号室からデモの列を眺めながら、改めて基地というものの巨大さと、基地をめぐる群衆のエネルギーのすさまじさを思い知った。

「琴尾明子も、あの中にいるのだろうね」

「あんな色白の格別に華奢な子が、どうしてだ・・・」

「わからないでもないな。なにか無性に、俺たちの前に敷かれた大きなレールや、大人たちのこしらえたからくりの満ちたルールに、思いつきり殴りかかりたいときがある。もつとも、デモの連中が目指しているのは、そんな単純なことだけではないのだろうけど」

野田が真剣な調子でいった。

野田は、小田垣が姿を消してから、もともと口数が少なかったのが、めつたに口をきかなくなつた。授業にも出、机にもこれまでと同じペースでついているのだったが、時々ぼん

やり窓の外を見ている。

小田垣のいなくなつたA―2号室に、野田も坂上も、めつたに顔を見せなくなつた。

私は、小田垣がいなくなつたことが、もし校長に関係しているのだとすれば、どうして私が残されたのか合点がいかない。あの晩、小田垣が校長に呼ばれたこと、その数時間前の校長室でのこと、と考えていくと、二人とも呼ばれて然るべきではなかつたのかとも思えるし、むしろ、ドアを開け、ずつとノブを握つていたのは私であつたのだから、小田垣よりは私の方により問題がある。

もし、あの日の校長室のことが原因で、小田垣だけが呼ばれたのだたとすれば、私の行為により私が受けなければならぬ処置を、小田垣が誤つて受けた、ということになつてしまふ。

私はそれ以来、殆ど部屋に籠もつてばかりいる。が、部屋にいても気持ちが集中でできず、参考書を開くこともない。思ひ出したようにページを繰ることがあつても、活字がちつとも頭に入らない。

そんな私を思つてか、野田も坂上も私を遠まきにしていふうであるが、野田は、小田垣が呼ばれたとき、どうして自分たちはいまのことに思い至らなかつたのか、と悔やむ。

野田は、インクの文字を発見したのは自分たちであり、校長室に報告をしようとしたのも自分の考えであつたから、小田垣だけが遠ざけられたのは納得できないという。野田にと

つて、小田垣は友であり、ライバルであり、ある意味では最大の敵でもあるのだったから、シヨックは人一倍大きいのだつた。

情報にはいつも敏い坂上も、小田垣のことでは「教会の噂以外」なにも得るものがないらしく、当事者であつた皆の自分たちがなにも知り得ないということで、イライラを募らせている。そういうことでか、「やっぱり父親の危篤つてのは、本当かもしれない」といいだした。

私も、小田垣がいつか、「多分自分は大学には行けない定めだろうよ」といつていたことがあつたのを思い出した。

その時は、半分冗談にしか聞いていなかったが、小田垣にはなにか特別な事情があつたことだったのかもしれない。

ただ私は、あの日、校長室で見たことを、野田にも坂上にも話していない。それは、自分があの時目にしたことが、本当に現実のことであつたのか、いまでも信じられない思いがするのであるし、ふと、自分は幻を見たのではなかったのかと、考えてしまう。

その思いは日を追うごとにますます強くなり、「やはり、小田垣は自分の身代わりとなり、身を削る羽目に陥つたのだ」という慙愧の念が激しく競りあがってくるのだった。

校長の方は、いよいよ市議選に本腰を入れる構えのようである。この頃は、青い背広の出入りがますます頻繁になり、新聞紙上で見たことのある人物も出入りするようになって、県道にはいつも高級車が停められている。それに応じて、校

長の方からも出かけて行くことが頻繁になつた。

私は、校長に出会う度に、その表情のなかに小田垣のなにかを臭ぎとろうとするのだが、そんな気配は微塵もみせない。どころか、日を重ねるにつれ、面構えが引き締まり、特にデモの荒れた日などは、私たちへの懇話は威圧的でしたらあつた。

「琴尾明子は、身籠もつてるといふぜ」

坂上が、私を追い越しぎまにいった。

小田垣もだけど、同様に気になつている彼女のことだ。

原潜寄港反対の連中と行動をともにしていう。この校の妖精と呼ばれた彼女が……ずっと胸の奥に抱えていた彼女の香が、白い肌が……思わず、はらりと落ちた。

「青山が姿をみせないで、雨宮さんに訊いたら、琴尾明子が身籠つたということを知つた青山は、昼間から自棄酒をおつて、街をうろついているという。勿論、替玉組の連中が、やつ不在をうまい具合に隠し通してららしいけど」

「俺の名前を持ち出したりなどしてまで、青山のやつ、よほど彼女にいかれてたんだな」

野田がこころもち眉を寄せ、行く手の星条旗と日の丸の翻つている白い建物を見上げながらいった。

この場所には、ポートの日以来、私たちは来ていない。デモの列が、この建物を目標に渦巻くようになってたためでもあるが、「ここは、あまりグッドなところではない」と、肩をすぼめていった黒人兵のあの大きな目玉の表情が、なぜか私

たちの心の隅に、奇妙なわだかまりを残している。

あのときの黒人兵は、いまも白い建物のなかにいるのだろうか。あの建物の内側において、毎日のように荒々しく包囲するデモの列を、大きな目玉をバクバクさせ、眺めているのだろうか。

「こいつだよな、やつぱり。『日本人が入ることは、日本の法律で禁止されています』かあ。この狭い街の唯一の平野ともいえる部分をだぜ、鉄条網で切り取ってしまいやがってよ。俺たちの家など、崖の中腹のいまにも転げ落ちそうなところに、やつとつかまつてるといふ具合だもんな。まあ、いま、この街を取り巻いている状況は、そんなケチなもんじやないってことは、薄々はわかるけどな」

「小田垣がいたら、やつぱりAとB、BとCが入れ替わるかどうかの話にしか過ぎないさ、とでもいうのかな」

「小田垣に、琴尾明子に、青山、雨宮、俺たち……」

「どいつもこいつも、なにやつてるといふんだよ……」

「基地に、黒人兵に、校長に、デモの群衆か」

私たちは、デモの連中が散らしたピラや千切れた旗竿や、折れた角材などが落ち、夕陽に焼かれている歩道を、やけに細長く折れて伸びた自らの影を揺らしながら、S川の河口に向かいゆっくり歩いて行った。

ある日の明け方の夢である。

私と小田垣が、白い建物の内側において、ヘルメットを被り

歩哨に立っていた。頭上には星条旗と日の丸が翻り、私たちは眠気を催すほどの陽射しを浴び、あとわずかになった持ち時間を数えていた。持ち時間が終ると、野田と坂上が交替することになっている。

「久しぶりに、街に出るか」

小田垣が囁く。私は小さく頷き、OKのサインを出した。私たちは、故郷のフロリダを出て、もう三年近くになる。

前後の訓練の期間はあつたが、半年足らずを前線で過ごし、やつとフロリダに帰れると思つていたら、どういうわけか日本のS基地に配属され、毎日眠たくなるような日を送ることになった。このS基地といつたら狭苦しいことこの上もなく、することといえば、食つて寝るだけの生活なのである。

最初のうちは、繁華街に出かけ、浴びるほどビールを飲み、近寄ってくる女を片っ端から口説いたものだが、一か月もするとそれらにも飽いた。いまでは、自分のベッドに寝そべり、ただぼんやり天井を眺めているばかりである。

多いときは週に二、三通と、頻繁に届いていたガールフレンドからの手紙も、だんだん間遠くなり、いつの間にかとうとう途絶えてしまった。自分の方からは、何度も近況をしたため、自分の気持ちは変わらないし、以前にも増して彼女を愛していると書き送るのだが返事はない。

これは、私だけではなくみんな同じことのように、小田垣などは、

「この世のあらゆる武器のなかで、時間というやつが一番の

凶器だ。ミサイルや原爆も、何十万、何百万という殺傷力を持つているが、時間というやつにはてんでかなわない。やつは世界中のすべてのものを、確実に、それこそ根こそぎ消し去ってしまうのだ。そいつの前には、勝った者や敗けた者など、なんの意味もたない」

などと、伸び放題の顎髭を撫でながら、所在なげに呟く。とにかく、私たちは一日も早く、S基地を出て、フロリダに帰りたいのだった。

「坂上のやつがな、いい店を見付けたっていうぞ」

「とびきりいい女でもいるのか」

「いや、女など一人もいない。どころか、男もいない」

「誰もいない？」

「いや、いることはいる。しかし、人間ではない」

「人間ではない・・・？」

「切符を買って入る。すると、三つの入口に進む通路がある。どこに入ってもいいのだ。そのかわり、一度入ってしまったら、元の入口には戻れない。進むより他ない。酒は飲み放題だし、疲れたら朝まで寝てもいい」

「迷路ってやつだな」

「違う。道は、過去、現在、未来のコースに岐れていて、自分のその時々様を見ることが出来る。坂上のやつは、過去のコースに入り込み、草原を駆けている一角獣であった頃の自分を見たそうだ」

「坂上が一角獣か、面白い。いったいどんな仕掛けがあるの

だ」

「わからん。とにかく、一瞬目の前が白くなって、煙みたいなものが、小さな穴のなから吸い出されてしまうまで、一角獣の坂上が血反吐を吐きながら、他の肉食獣と闘っていたという」

「入った穴のなから吸い出されて、終るのかあ」

私は、感嘆の声を洩らした。

突然、小田垣がカービン銃を構え、あたりの気配を臭ぎ始めた。そして、「伏せろ！」と鋭く叫んだときだった。

私たちの耳のすぐ傍を、つぶてのようなものが、ひゅうとよぎった。

それが、合図だった。バラバラと、四方からの石つぶてが、私たちをめぐりかきとんできた。鬨の音があたりでいつせいにあがり、音量いつぱいのアジが、シュプレヒコールが、私たちを包囲し、その囲みがみるみる狭まってくる。

降り注ぐ石つぶてをかいくぐって、やつとの思いで目を上げたとき、群衆の先頭で旗竿をかざしている者と目が合った。琴尾明子だった。琴尾明子が正面の扉の上段によじのぼり、私たちに旗竿を突き付け、「やつらを、殲滅せよ！」と叫んでいる。琴尾明子は、身重の肩にかかる長い髪を振り乱し、

白い顔を朱に染め、阿修羅の形相で叫び続けている。

私は小田垣に目くばせすると、カービン銃を投げ捨て、建物の後にして駆け出した。小田垣もカービン銃を捨て、ついて来る。私たちは前になったり、後ろになったりしながら、

芝生のなかを右に左に息急きぎって駆ける。

その私たちを、角材が、投石が、シュプレヒコールが追いかけてくる。

「S 基地撤去！」

「原潜寄港反対！」

「市議選粉砕！」

「特待生制度粉砕！」

ヒステリックなシュプレヒコールが、石つぶてが、私たちの頭を耳を背中を、容赦なく打つ。彼らの先頭に立つ琴尾尾子の声がすぐ近くに迫り、誰かの手が私の襟首をとらえようとする気配に、思わず振り返った。そして、一旦襟首にかかった手を必死で振りほどき、また駆け出そうとした。

そのとき、私は、自分が一面にたち込めている煙のようなもののなかにいることを知った。煙のなかを駆けている自分が、一足ごとに空へ空へと上っている。

群衆たちの追跡を、やつとのもので振り切った私は、雲の高みにまでのぼり、あたりを眺めわたし、始めて小田垣の姿が見えないことに気付いたのだった。

私は、小田垣を探した。雲の上を、下を、群衆たちの間を、必死に目を凝らして探した。しかし、小田垣の姿はどこにもなかった。

私はいま、自分が上って来たあたりに、二つの小さな穴が微かな口を開けているのに気付いたが、小田垣が、またその穴の奥深くを彷徨っているのだとは、どうしても思えないし、

信じられなかった。

「小田垣、小田垣」

何度も、私は小田垣の名を呼んだ。

「小田垣、小田垣・・・」

野田に揺り起こされ、私はやっと眠りから醒めた。体中に汗をかき、知らないうちに、頭や顔を掻きむしり、ひりつくほどの傷を肌につくっていた。

私が野田に夢のことを話すと、野田はしばらく私の顔をまじまじと見詰め、「その夢には、校長は出てこなかったのか」と訊き、出てこなかったという、ふうつと溜め息をつき、後手にドアを閉め、部屋を出て行った。

二十数年経ったいまでも、私は、まだ同じ夢をみることもある。

私は、いつも雲の高みのあたりから、恐々腰を引き、下を眺めやっている。しかし、なにも見えない。

二十数年前、確かに見えた（筈の）あの小さな二つの穴は、あれ以来一度も見えない。ひよつとして、小田垣がぐぐったかもしれないあの入口を覗きこんでみたいと、私は何度目を凝らそうとして、ベットから転げ落ちそうになったことだろう。

真実、あの日以来、小田垣の消息は全くつかめない。

確かに、二十数年前、小田垣の父親が病死していることは間違いない。

ところが、小田垣が、死の床にある父親の元に駆け付けたという話は、親族の誰に訊いても出てこない。どころか、当時、父親の容体が悪化する度に、母親が予備校あてに電話をし、電報を打ち、心当たりのところに手紙を出しても連絡がとれず、返事もなかったという。

予備校に問い合わせれば、「外出中」だとか、「伝言をしておく」という返事ばかりで、小田垣の不在を知ったのは、半年が過ぎても帰らないのを訝つて訪ねた、翌年の四月だという。

「どうして、もう少し早く訪ねなかったのでしょうか」

母親は、悔やんでも悔やみきれない、と唇を噛み、

「なに一つ、あの子から連絡がないのです。二十数年もの間、ハガキ一枚来ないのです。もし、生きていたら、どんな小さなことでも、どんな恥ずかしいことでも、なにかひとことぐらい知らせて来てもいい筈ではありませんか。やつぱり、もうこの世にはいないのでしょうか。でも、私は諦めません。諦められないのです。じつと耳を澄ましていると、すぐそこらあの子の声が聞こえてくるような気がします。私には、あの子はきつとこの世のどこかにいて、ちゃんと一人前の生活をしているとしか思えないのです」

と私の新しい勤務先がやつと決まったこともあり、久しぶりに訪ねて行った時も、そういいながら涙ぐんでいた。

母親は、生れながらのクリスチャンだそうで、あの寮の傍の教会の話には眉を顰め、小田垣のことは、「すべては、主

の御はからいのままにあるのですから」というのであったが、やはり折節には心が騒ぎ、いたたまれないのだという。

それにしても、私は、現代のこの社会のなかで、一人の間が、二十数年の間、在るかなしかも定かではない、などということがあり得るのだろうか、と考える。

本人からの連絡はない。警察でも、すべての関連をあたつてくれたが、事件の絡みは考えられないという。浮浪者のなかにも疑わしい人物はあがらない。とすると、あとに残された道は殆どない。

小田垣が、自分自身の意志でか、あるいは自分を全く失うことにより他人になりすまし、なんらかの理由で、その事実が明かせない場合。もしくは、小田垣がもはや、この世に存在しない場合・・・。

私の勘では、小田垣ほどの自我の強い男が他人になりすましなど、まずあり得ないことだと思ふし、例えなにかの事情で他人になり変わっていたとしても、あれだけの強烈な個性の波動が誰にも伝わらない筈はないと思う。あるいは、この世に既にもいないのではないかということの方は、全身の神経を研ぎすまし、小田垣のことにすべての意識を集中しても、「否」ということの答えしか、私には得られない。

野田や坂上にしても考えは同じで、「あいつは、殺されてもくたばるやつじゃないよ。案外、いま頃は、この世を裏で操るボスとして、われわれのすぐ近くで辣腕をふるっていたりするさ」と、いうのだったが、話はあとに続かない。野田

も坂上も、あの日以来、小田垣の机の上で日に日に薄茶色に変色し、体臭を失っていった、あの吊された下着と靴下のことを明瞭に覚えている。

校長は、市議の二期目の途中、心筋梗塞で倒れて死んだ。

二十数年前、基地の街を揺るがしたのは、連日激しく荒れるデモと、それらの反対を押し切つて入港した原潜のことであつたが、もう一つ新聞紙上を賑わしたのは、市議選での違反のことであつた。

「新人保守系候補である、予備校経営者によつて多額の現金がバラ撒かれた」

と記事は伝えているが、その記事に注目したのは、当時でさえごく一部に限られていたといつてよい。

それほど、原潜入港をめぐるニュースは全国の耳目を集め、引き続きベトナム戦争への関心の高まりとなり、そして学園紛争へと、野火が広がるように、時代を切り裂いていったのであるが、市議選での違反の方は、小さな燻りをみせただけで、いつの間にか世に置き去られてしまった。

この混乱の時期を、校長が意図的に狙つたものかどうかはわからないし、好運といえるのかもわからない。

校長は上位当選を果たし、逮捕者を数人出しただけで、地位は全く揺るがなかつた。どころか、議会では好位置につけ、さらに上位のポストを手に入れようとする直前に、倒れたのだつた。

倒れた校長の残したものは、巨額の負債と、秋季講座の途中で放り出された、八百人の生徒たちと、二十人近い教職員たちであつた。S予備校は、校長の死とともに、まさに一夜にしてこの世から、その姿を消してしまつた。

私は、政治への関心が薄いため、校長の真意のほどは凶りかねるのであるが、どうしてこういう賭けの方を選んだものか、わからない。初代で築き、二代で蕩尽し、ということがこの場合に適切であるかどうかは疑問であるが、校長は校長で、なにかの目標にあと数歩というところまで詰め寄り、そのおぼろげな姿を捕え始めるところまできて、結局うつちやられてしまつたのであつたらう。

とにかく、S予備校も、勿論紫雲寮もいまはなく、建物のとり壊された跡地には、雑草の繁る間もなく中央資本の大手スーパーが進出し、結構賑わいをみせていると聞いている。

私は、これまでの教壇に立つ仕事から一転して営業の方に変わったので、うまくことの運ぶ訳もなく、殆ど人間失格ではないかとも思える屈辱まで味わつてきたのであるが、テキスト販売という、内容的には既知の分野であり、友人や同僚にも比較的恵まれていたため、思ったほどには神経を擦り減らさないで済んだ。というより、体の方が先に疲れ果てており、ビール一杯すら飲み終えないうちに、倒れるように眠つてしまふのだつた。

だから、この頃、ずっと夢をみることもなかつた。夢をみ

る間も惜しんで、身も心もすべて眠りに落ちていたのだったろう。

しかし、同窓生名簿が届いた日、小田垣の欄に「米国在住」と記されているのを見、久しぶりに紫雲寮の写真を取り出して眺めた晩、私は長い（時間にすれば、ほんの数分にか過ぎなかつたのかもしいが）夢をみた。

私と小田垣は、あの白い建物の前に立ち、余り過ぎるほどの陽射しを浴びながら、あまりの退屈さに、何度も欠伸を噛み殺していた。私たちの持ち時間はあと数十分で、次の歩哨には、野田と坂上がやって来る。

「坂上が、いい店をみつけたっていうぞ」

「いい女がいるのか」

「違う、違う。女なんていないさ。女も男もない」

「じゃあ、誰も人間はいない？」

「とうわけじゃない」

「・・・？」

「三つの入口がある。過去、現在、未来、の三つのコースだ。切符を買い、そのどれかに入るのさ。すると、自分の希望の姿を見ることが出来る」

「自分の、過去、現在、未来の姿？」

「そう、自分のだ。どうだ、愉快だろ」

そのとき、私は、私と小田垣が入れ替わったら、そして小田垣の未来の穴に入ったら、あの日から後の小田垣の姿を見

ることが出来る、と考えたのだった。

私は、胸のポケットから財布を出し、小田垣に百ドルを渡した。小田垣は、「面白い」と目を輝かせ、二人が交替することを、一も二もなくOKした。

「グッド・ラック！」

私たちの契約が成立し、二人がウイंकを交わし、お互いの中に歩み入ろうとしたときだった。

突如、あたりを揺るがすスピーカーの音量がこたまし、アジが、シユプレヒコールが、石のつぶてが、私たちがけて降って来始めた。

私が小田垣に、小田垣が私になる寸前だった私たちは、お互いの顔を見合わせ、舌打ちし、二人が交替するのはしばらく後にすることにして、とにかくこの場合は、逃げ出すことに決めた。

それほど、私たちを取り囲む群衆の隊列は多かつたし、その一人一人が角材や旗竿を手に、黒いヘルメットを被り、とさきの声をあげて迫って来るのだった。

「S基地撤去！」

「原潜寄港反対！」

「市議選粉砕！」

「特待生制度粉砕！」

私たちは、なにかに躓き、なにかにぶつかり、なにかを蹴倒して夢中で駆けた。目の前を塞ぐものを払い、殴りつけ、あるいは突き飛ばし、息せききって、全速力で駆けた。

数キ口も、数十キ口も走つたと思つた。数時間も駆け続けたと思つた。

「やつらを殲滅せよ！」

私たちの頭上で、鋭い叫び声があがった。見上げると、体の線が目立ちはじめた琴尾明子が目を吊りあげ、肌を朱に染め、阿修羅の形相で旗竿を私たちに突きつけている。

「やつらは敵だ。保守反動腐敗の手先である校長の飼いだ！」

「本館三階に住む、特権的ブルジョアジー予備軍だ！」

「紫雲寮を見下ろし、ひたすら権力への道を突つ走る帝国主義者を殲滅しろ！」

驚いて目を凝らして見ると、琴尾明子の向こうに青山がいて、殆どつぶれてしまつたしゃがれ声を張りあげている。自棄酒を飲んで、街をうろついていたという青山とは、別人かと思えるほどふてぶてしくみえる髭面に角材をかざし、少しでも隙をみせたなら、いつでも飛びかかろうという構えである。青山の後ろには雨宮もいて、二浪の貫禄をみせ、紫雲寮の一般生八十人を背中にひき連れている。

万事休すだ、と私たちはもはや駆けるのを止め、両手を頭上にかざし、群衆の前に歩み出ようとした。

その時だつた。

「こつちだ！」

なにものかの知らない声が、私たちの身内に起こり、強靱な力で、私たちの体を宙に浮かせた。私たちは、足をバタつ

かせる間もなく、いきなり群衆の上に高々と引きあげられ、雲のようなものに包み込まれたかと思うと、上へ上へと運ばれていく。

私は、途中で、小田垣のことが気に掛かり、振り向くと、すぐ近くに、吹き流されたみたいなの、微かな白いものが漂っているのを見付けた。しかし、肝腎の小田垣の姿はどこにも見当たらなかつた。

私は、小田垣の名を呼んだ。私は、懸命に名を呼び、白く漂うものを端から端まで、何度もまさぐり、掻き分け、目を凝らし、覗き込んだ。すると、微かに漂っているものの、いまにも消え去ろうとするあたりに、小さな穴がポツンと一つ開いているのを、ようやくそれと見てとつた。

私は、穴に指をかけ、強引に押し開き、その底を覗き込もうとした。懸命に小田垣の名を呼び、煙り流れる霧を払って、穴の奥底を見通そうとしたときだつた。後頭部に鈍い痛みが走り、瞬間、私は軽い脳震盪でも起こしたらしく、頭をかかえてその場にうづくまつてしまった。

気が付いたとき、小田垣を包んでいたと思われる白いものは、いつの間にかあたりの空気と識別することも出来ないほどに薄れ、まるで霧が晴れていくみたいに乾き始め、私のわずかな頭上をふわりふわりと漂い、空へ、空へとたち上っていくのだつた。

(了)